Research Institute for World History

Newsletter

No. 12　December 2007

CONTENTS

1. 南塚信吾「日本における西洋史学と西欧中心主義の克服
ー明治期の『万国史』の教訓から」

2. 木村英明　「文献紹介　Julia Adeney Thomas, “High Anxiety : World History as Japanes Self-Discovery”, (in *Writing World History 1800 -2000*. edited by Benedict Stuchtey and Eckhardt Fuchs, Oxford University Press, 2007.)」

3. Web 世界史「Historical Voices」

4. 世界史研究所からのお知らせ

http://www.npo-if.jp/riwh/

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室

RIWH　npo-if

世界史研究所「ニューズレター」第12号　2007年12月

日本における西洋史学と西欧中心主義の克服
—明治期の『万国史』の教訓から

南塚 信吾

日本の西洋史の研究と教育における西欧中心主義をいかに克服するかが、今回のテーマである。わたしは、東欧史を専門にしている関係上、西欧と東欧とを区別して考えることが多く、今回も「西洋」中心主義ではなく、「西欧」中心主義と考えることにしたい。ところで、この西欧中心主義という問題は、西洋史のみならず、東洋史、日本史をふくめた日本の歴史学全体の問題である。また、それは、たんにテーマが西欧中心的であるというだけではなく、歴史の方法そのものの西欧性の問題でもある。さらに、それはたんに戦後の問題ではなく、明治以来の日本の歴史学の体質の問題でもある。したがって、この問題は報告者が簡単に答えられるはずもない大問題であると言わざるを得ない。そこで、今回は、この問題について報告者が最近考えていることの一端を報告して、問題解決への一歩とするにとどめたい。

1. 日本の西欧中心主義

1）「三層構造」

日本では、第二次世界大戦以前からの歴史認識の構造として、日本が学ぶべき対象としての西欧の歴史、西欧に追いつき追い越す主体としての日本の歴史、日本が主導し支配するべき対象としての東洋の歴史という「三層構造」ができていて、ここに西欧中心主義の基礎構造があった。

このような歴史認識の構造に対しては、戦後の 1950 年代から上原専禄、江口朴郎らを先頭として批判がなされ、1960 年代以降是正の試みもなされてきた。その一つは、「世界史」という枠組のなかで、「三層構造」と西欧中心主義を克服しようという試みであった[1]。1950 年代から今日まで日本では非常に多くの「世界史講座」が編集され出版されてきている。今日まで 20 シリーズを超えており、1960 年代には 6、70 年代には 4、80 年代には 4、90 年代には 8 シリーズが、出版されている。これらの世界史では、西洋史・日本史・東洋史の三層構造を克服した世界史を作ろうという意欲が、継続されてきている。

たしかに、西洋史自身において西欧中心主義の批判は難しい。西洋史は蓄積もあり、方法的にも高度化されているからである。西洋史がヨーロッパ中心主義を脱するには、西洋史内部からの努力もさることながら、世界史という視座は不可欠だと考えられる。

しかし、このような「世界史講座」も、いくつかのものを除けば、なお、西欧中心主義を脱却できていない。つまり、扱う対象としては確かに非ヨーロッパの比重は大きくなり、深みも増したが、その史的研究のための方法はますますヨーロッパ的になっているとさえ言えるのである。

2）西洋史の方法

歴史学の方法という意味で、日本の歴史学は、西洋史を学ぶにしても、日本史や東洋史を学ぶにしても、西洋史で培われてきた歴史の方法を「輸入」し吸収するという体質を乗り越えてはない。実は、今日問われなければならないのは、まさにこの点なのである。

戦後の日本の歴史学の柱であったマルクス主義の歴史学は、たしかに歴史学の水準を高めたのではあるが、実は同時に、西欧中心主義を促進したのでもあった。たとえば、それは西欧を頂点とする一定の発展段階の概念を植えつけた。

1970 年代から、マルクス主義の歴史学の「後退」に伴って、ドイツ、イギリス、フランスの歴史学の方法がつぎつぎと日本の歴史学へ「輸入」されてきた。社会史、文化史、世界システム論などがそうであった。

1980 年代の日本の歴史学は、グローバリゼーションのなかで、ポストモダンの歴史学の影響力を、大なり小なり受けることになった。そして 1990 年代は、ポストコロニアルの方法の影響を受けている。前者は「言語論的転回」であり、後者は「構築主義」の方法である。はたして、どれだけポストモダンやポストコロニアルの本来的意義を踏まえて「輸入」が行われているのかは、疑問がないでもないが、ともかく、近年の日本の西洋史はもとより歴史学一般の成果にはこれらの大きな影響を認めないわけにはいかない。

こうして、歴史学の方法について西欧中心主義が、ま

すます進んでいる。その結果、日本での世界史の試みも、扱う地域は非ヨーロッパに広がったとはいえ、方法的にはますます西欧中心主義になってさえいるのである。

本報告では、日本においてそもそも世界史や西洋史が始まった明治期に戻って、その時期の世界史教育の体質を点検してみたい。その理由は、そこにおいて確立する西欧中心主義が、その後の日本の、西洋史を含む歴史研究の基礎を形作っているともいえるからであり、今日西欧中心主義を克服しようと考えるならば、その基礎についての再検討がなされなければならないと考えるからである。なお、この作業はまだ始めたばかりで不十分なものであることを、あらかじめお断りしておきたい。

2. 西欧中心主義の始まり

1)「万国史」の変遷

明治期（1868-1911 年）の初めにおける日本の歴史認識は、国学、漢学、それに欧米の歴史学を取り入れた「万国史」によって構成されていた。すでに開国以後、中国から在中宣教師らの情報から世界の情勢は入っていたり、福沢諭吉の『西洋事情』（1866 年）などが出されたりしていたが、明治維新以後、日本は、「万国史」として世界の歴史を急速に取り入れようとした[2]。これは文部省が率先して行った事業でもあった。師範学校や中等学校などに向けては、アメリカやイギリスの歴史書を取り入れた教科書が作られた。A.F. タイトラー、S.G. グードリッチ（P. パーレー）、W. スウィントン、E.A. フリーマン、G.P. フィッシャーなどの “World History” や “Universal History” が、文部省の指導と検定の下、何種類もの翻訳書として出版され、教科書に使われた。

よく見るとこの「万国史」はわずか 30 年ほどの間に大きな変化を見せていて、その変化の結果、西欧中心主義を定着させていることが分かる。

明治維新直後の 1870 年代には、世界の情勢を広く知らなければならないという時代的要請があったためか、世界全体の動きを満遍なくあつかう「万国史」が紹介された。それは、パーレー『万国史』（1876 年）[3] に見られるように、世界地図をなぞるかのように世界諸地域の動きを差別なく扱うもので、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、そしてオセアニアという順で、大国ではない国の歴史も丹念に描いていた。師範学校の教科書『万国史略』、岡本監輔『万国史記』などもアジアから記述して、全体を扱っていた。タイトラーの教科書を参考としたとされる西村茂樹『万国史略』は、ヨーロッパからの視点ではあるが、アジアやラテンアメリカを視野に入れていた[4]。わずかに、福沢諭吉の弟子であった田中義廉の『万国史略』[5] のみが、ほとんどヨーロッパ史であった。

明治政府の富国強兵政策が確定してくる 1880 年代になると、スウィントンやフリーマンのようなヨーロッパ中心主義の「万国史」が影響力を強めた。それは、スウィントン『万国史』（1883, 1886 年）[6]、フリーマン『弗氏万国史要』（1885, 88 年）[7] に見られるように、「文明」の進歩を指導したヨーロッパ（アーリア人種）を中心に「万国史」を構成し、他のアジアなどはそれに関係する限りで扱うというものであった。これは「文明史」と呼ばれた。田尻稲次郎『万国史略』、天野為之『万国歴史』などもこれに属する[8]。「パーレー」的なものもいぜん見られはするが、しだいに勢いを失い、ここに西欧中心主義が支配的になった。福沢諭吉の「脱亜論」がでてくるのは、まさにこの時期 1885 年のことであった。こういう情勢のなかで、東海散士『佳人之奇遇』（1885 年―）のように、小国、亡国の連携を説く立場があったことは注目に値する[9]。

明治憲法が成立し、天皇制の元に国民統合が進められようとする 1890 年代にはいると、元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』、長沢市蔵『新編万国歴史』、木村鷹太郎『万国史』[10] などに見られるように、スウィントン的な「万国史」が依然支配的である中で、ヨーロッパ中心の「万国史」に対する反発も生れ、アーリア人種の歴史に対して、モンゴリアンの歴史を同等に扱うように求める動きや、日本的なものを強調する動きが出てきた。中原貞七『万国歴史』（1892 年）、今井恒郎『万国史』（1894 年）、大原貞馬『万国小史』（1896 年）らの「万国史」がそうである[11]。1880 年代末に始まった西欧中心的な「文明史」を批判する「日本主義」あるいは「国体史観」（宮地論文）が、1890 年代に台頭してきたことを反映したものである。しかし、これは「万国史」の西欧中心主義を覆すにはいたらなかった。

1890 年代後半に注目すべきことは、「万国史」に代わって「世界史」が現われたことである。この世界史にも当初は二つの傾向が見られた。ヨーロッパ史にわずかにアジアの歴史を付け加えるものと、ヨーロッパ史にアジア史を組み込もうとするものとであった。前者にあたる雨谷羊太郎『世界史要』は、「本書は世界史と言うが、要するにアリア人種の歴史なり」、まず欧州の大勢につうじ、その精神を熟知するべしと断言していた。これに対して坂本健一『世界史』は、「今日、世界史、万国史というも、欧州中心で、アーリア中心だ」と批判しつつ、本来は、東西地域広く古今東西を論ずるべきだが、自著

では「及ぶ限り東西の記事を一途ならしめんと期したり」としていた[12]。だが、坂本的な世界史はその後、継承されず、雨谷的な世界史が続くことになる。

しかし、いずれにせよ「世界史」は「万国史」ほどには盛り上がらなかった。それは、日清戦争を経たこの時期に、支那史から東洋史が生れ、万国史からヨーロッパ史が独立したからであった[13]。「日本主義」や「国体史観」からしても否定しにくい「文明史」は、西洋史のなかに囲い込む必要があったのである。また、「国体史観」を貫こうとすれば、日本史をアジア史の一環として考える余地はなくなったのであった[14]。日本のナショナル・ヒストリーが作られていくことになるのだった。もはや「万国史」、「世界史」の時代ではなくなったのである。そして、さらに日露戦争をへて、日本の歴史学において、西洋史・日本史・東洋史は、先述のような「三層構造」というべき位置づけをされ、そのなかに西欧中心主義は構造化されたのである。

2)「万国史」の方法

明治の初め以来「万国史」を取り入れてきた日本の歴史学は、その方法においても、欧米の強い影響下におかれた。「パーレー」やスウィントンやフリーマンが紹介されると、人民、人種、国民、民族、封建制、自由、文明、時期区分といった概念が、つぎつぎと導入された。もちろんそれらの多くは今日と同じ意味で用いられたのではなく、その後の意味の変化は十分に検討の余地があるが、歴史を分析する方法の枠組みを提供したことは明らかである。本来はこれらすべての概念の発生と展開を追うべきであろうが、ここでは 2、3 の点について、整理するにとどめたい。

第一に、歴史の主体についてである。

1870 年代の「万国史」においては、歴史は事件史であり、歴史の主体は基本的には「国」、君主、軍人であったが、一般に人々を指す概念としては、「パーレー」の翻訳では mankind, inhabitants, people, nation の区別なく人民という訳語が使われ、tribe に人種が使われていた。一般的に言って、権力に対立的なものとして、人民、平民、民という語が使われていた。西村は上にあげたもの以外に「国民」という概念を使っていたが、なお少数派であった。福沢が『文明論之概略』（1875 年）において「日本には政府ありて国民なし」と述べていたことと通じるものである。なお、社会と国家をより多彩に見ようとする岡本は、恐らくは市民に相当する「府民」、国民に相当する「国人」、そして、ポーランドのところでは「民族」という概念を登場させていた。だが、「民族」という用語は明治期には広がらないし、「市民」という概念も明治期の「万国史」には出てこない。

1880 年代になると、スウィントンの翻訳をつうじて、人民（people）、国民（nation）、人種（race）、文明という概念が整理されてくる。一般には「歴史は人類の生活の記録として纏められる」が、より厳密な意味においては、「名高き人民」つまりその仕事が「文明」の歴史を組み立てるところの「名高き人民」の登場や発展の話である。人民は、いくつかの人種に分けられ、その人種が国民を構成する。国民とは自然未開の状態を脱して政治社会をなしたるものであり、国民すなわち「文明人民」であるとされてくる。

1890 年代にはいり、ドイツ史の影響を受けていたフィッシャーの万国史を参考にした長沢市蔵『新編万国歴史』は国民をもう少し立ち入って考察していた。彼によると歴史が関心を持つのは、人が国民という一定の団体を作ってからである。なにがこの国民を作るのか。それは「一定の土地を占領し、同一の政治支配を受け、同一の言語宗教習俗等の如き共通の訂約を以って収束せられたるものなり。」これは、1880 年代末以来、陸羯南が「国民主義」を主張するなかで、国民をたんに文明化された人民とする以上に、「他国民に対する独立特殊の性格」をもつものとしているのに通じている。ただし、長沢も、歴史には二様あり、一つは、「各国民独立の歴史」、いまひとつは、「各国民を包括したるの歴史」であるとする。このうち第二の歴史が万国史である。「万国史中に論ずべきものは、社会全体の進歩に関係し、今日の形勢を作るに預かりて力ありし国民なり」として、西欧中心主義を補強したのである[15]。こうしてナショナル・ヒストリーは基礎付けられた。

ここに見た諸概念は当時の明治期の脈絡において検討し直さなければならないが、こうした西欧的諸主体の「発見」を通して日本の歴史学には西欧中心主義が浸透し補強されていったのである。

第二に、歴史の展開の要因であるが、1870 年代には、「自由」がキーワードであった。すでに西村は「民の自由」という概念を持ち込んでいたが、パーレーにおいては「自由」がより強く出てくる。これは、岩倉具視を団長とする明治政府の欧米使節団の記録である久米邦武『遣欧使節団・米欧回覧実記』（1878 年）にも「自由」の重視が見られるとおりであり、「自由」はこの明治初期の共通の価値であった。

1880 年代になると、自由のほか「文明」civilization が

登場し、これが決定的となる。すでに福沢諭吉『西洋事情』（1866 年）や『文明論之概略』（1875 年）以来、西洋の「文明」への関心は始まっていたが、この 1880 年代にはすべての「万国史」のなかに、文明を論ずる章が配置されるようになった。この文明としては、思想、文学、技術、芸術までが広く扱われていた[16]。「万国史」を、文明の発展を担った国民に即して描き、他はそれに関連する限りで組み込むという方法がここに広まった。これはスウィントンの説に従ったもので、かれは、「コーカシアン」人種が「重なる開化をなしたる国民」を生み出したのであり、文明はこの人種の脳髄の産物であり、それ以外の人種の人民は「静止」し、進歩に貢献していないと論じたのである。こういう議論は、当時の自由民権の議論と大きな矛盾を引き起こさなかった。フランス革命期の民主主義の思想、自由、平等、人権、そして国民の力などを「文明」の発展の頂点として示されるとき、自由民権の時代において、文明史は受け入れざるをえない史観であったのであろう。

1890 年代になっても文明史は強く、たとえば、元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』は、「万国史」は、「万国文明史」であると断言していた。そして史体には二つあり、その一つ（古体）は、王侯将相の政策偉蹟、交戦の勝敗等の情況を精細に叙述するもの（叙事史体）。今ひとつ（新体）は、精確に事の実蹟を叙述し、これに論評を加え、得失を弁じ、もって、原因結果を述べ、そうして文物風教を講ずるもの（文明史体）であるという。その文明史体の観察の要点といえば、法則的見方である。社会の事は偶然に起こるものではない。皆一定の「法則」のもとに支配せらるる。社会の大法則にしたがって原因結果の関係を明らかにすることが歴史家の仕事である[17]。

こうして「自由」、「文明」、「法則」という概念をとおして、西欧中心主義は正当性を得ていった。

第三に、時期区分を見てみよう。1870 年代の「万国史」では、タイトラルの翻訳である西村の『万国史略』が「上古」「中古」「近世 modern」いう時期区分をし、5 世紀の西ローマ帝国の崩壊までを上古、「コロンブス」からを近世とし、その間を中古としていた。しかし、他の万国史はいずれも明確な時期区分をしていなかった。「パーレー」も時期区分を設けていなくて、代わりに人種の発展段階として、野蛮・未開・開化・最上開化の人種を区別していたのだった。

だが、1880 年代になると、スウィントンの『万国史』をはじめとして、ほとんどの万国史が明確な時期区分を持ち込んだ。区分の仕方はタイトラルのそれと同じで、「上古」「中古」「近世」という時期区分をとっていた。天野やフリーマンの「万国史」もこの時期区分を採用していた。これは 1890 年代の元良、家永、長沢、木村にも引き継がれた。面白いことに、長沢は近世の区分をトルコによるコンスタンチノープル占領においていた。また、雨谷『世界史』は上世史、中世史、近世史のあとに現世史（ナポレオンのあと）を設けていた。ちなみに、この時期、「近代」という用語はまだ定着していなかった。

こうして、「万国史」を見るための時代区分が、ルネサンス・宗教改革・「地理上の発見」、あるいはフランス革命とナポレオンという、ヨーロッパ的な画期からの区分に収斂・定着していくのである。わずかに、この時代においても、坂本の『世界史』のみが、ヨーロッパ的な時代区分を取らず、明確な区分を避けていることが注目される。アジア史を十分に取り込もうとする彼にとって、ヨーロッパ的な基準は採用しにくかったのであろう。

こうして、いくつかの例外はあるものの、明治期に西欧中心主義の歴史観は成立した。これは 1890 年代の「国体史観」の動きによっても崩されることはなかった。

この明治期の万国史において定着された西欧中心主義は、その後の日本の歴史学を規定してきており、それを克服するのは容易ではない。

3.「アジアからの世界史」

西欧中心主義の歴史観を乗り越えるために、日本の歴史学が試みてきた努力の一つは、アジアへの目、アジアからの目の重視であった。

1950 年代から 70 年代まで日本の歴史学は、上原専禄や江口朴郎らを先頭にして、「アジアのナショナリズム」を重視し、そこから学ぶことによって、歴史像を再構築しようとしてきた。しかし、この動きは、「中越戦争」の勃発などをきっかけにして、挫折してしまった。代わりに、アジア・アフリカのナショナリズムを、より現実的に研究しなければならないという方向への転換が始まった。1980 年代以後、アジア・アフリカの歴史はより深く研究されるようになったが、先述のとおり、方法的にはポストモダンやポストコロニアルといった西欧的方法に支配されがちである。

上原や江口のアジアへの視点を日本の歴史学は十分に受け止めてきたのだろうか。その点で改めて考えなければならないのは、江口らとはやや違った角度からアジアの重視をうたっていた竹内好であろう。竹内好は、明治以来の日本の思想を論じる中で、本来のアジア主義に注目していたのだった[18]。誤解のないように付け加えてお

くと、竹内はアジア主義をアジア諸国の対等の協力関係に基づくものと考え、「大東亜共栄圏」のようなものとは考えていないのであった。明治期の「万国史」の動きを見てみると、十分な議論の結果ではなく、政治的要請によって、アジア主義を捨て、西欧中心的に流されてきたように思われる。この点の確認がまず必要であろう。

今日西欧中心主義を克服しようとするならば、明治期に捨てられた歴史の方法に注目するということも必要ではないだろうか。たとえば、1870 年代のパーレー、岡本らの「万国史」の流れ、1880 年代の東海散士の観点である。あるいは、1890 年代の中原、今井、大原らの「万国史」の方法である。さらには、1900 年代初めの坂本の「世界史」もそれに属する。それらは、非西欧世界を差別しない「万国史」の見方であり、洋の東西を絡めた歴史である。そのすべてがアジア主義というわけではないが、アジアへの視点、アジアからの視点を排除しない「万国史」であった。アジア諸国の対等の協力関係に基づくという意味でのアジア主義との関係で、「万国史」を点検しなおす必要があろう。

その作業を通じて、アジアの視点からの世界史というオールタナティヴが構築できないであろうか。もちろん、日本の歴史家の場合、日本が隣国に対して行った行為の歴史的反省に立ったものとならざるをえないであろう。そのようなオルターナティヴの構築は報告者の力の及ばぬところであるが、いくつかのヒントはありそうである。まず第一に、アジア史に即した時期区分というのは考えられないであろうか。明治期には、ほとんど議論の余地なく西欧的な時期区分を取り入れてしまっている。

第二に、歴史の主体である民族、国民など、あるいは歴史の展開の要因としての自由などについて、アジア史に即した対抗概念を設定し、歴史を見直すことはできないであろうか。

第三に、文明に代えて文化を歴史の価値基準とした場合、どのような歴史像が描けるのか、検討して見ることはできないであろうか。

こうした地道な検討を積み重ねることによって、上原、江口が提起した立場がより深められたものになり、アジアからの世界史を構想し、そして西洋史を書き換えることができるのかもしれない。だが、これは歴史学の「大転換」の必要を示唆している。そのような「大転換」は一朝一夕にできるものではない。さしあたり、転換は足元からの反省を積み重ねるということしかないように思われる。

4. おわりに

グローバリゼーションのもとで、ヨーロッパという枠にとらわれることなく各地に進出し世界を舞台に再生産されるヨーロッパの歴史、あるいは、アジアを踏み台にして繁栄するヨーロッパの歴史が現実としてある。ヨーロッパ史に閉じこもっていると、このことが見えなくなるのではないかと恐れる。1980 年代からのグローバリゼーションのなかで、知らず知らずのうちに、欧米の価値観が世界を支配し、歴史学をも支配してきているのである。

1990 年代以降、日本のヨーロッパ史は、著しく細分化し専門化してきている。そのなかで、対象としてもまた方法的にも、新しい側面に光が当てられてきたことは、まぎれもない事実である。しかし、それと同時に、ヨーロッパ史のなかで立てられた問題に答えていれば、それで歴史研究であるとか、ヨーロッパ史を研究していれば、それで世界史に繋がるという、無言の「箱庭」的発想ができてきているのではないかと危惧される。西洋史は、「箱庭」としてのヨーロッパ史に閉じこもっていることは許されない。ヨーロッパ史をつねに突き崩すようなものこそヨーロッパ史研究に求められている。

さしあたり、足元からの反省をするとすれば、まずは、ヨーロッパ史を研究して、それで世界史が描けたとは思わないようにする必要がある。ヨーロッパ史を研究する人は、ヨーロッパ史自体で完結させないで、そのテーマの持つ世界史的な意味を絶えず考えながら研究する必要がある。

つぎに、そのためにはアジアからの目でヨーロッパ史を見る事が有益であろう。かつてレーニンが言ったように、「すすんだアジアとおくれたヨーロッパ」といった視点に立ってみるということも必要であろう。自らのテーマや方法を、アジアのなかに置き直してみて、その意義を考え直すということが、今こそ求められている。たとえば、西洋史で普通に使われる市民や市民社会や民主主義や民族や国民といった概念の適応可能な地平を、一度は問うてみるということも必要であろう。これが十分に行われていないところに『新しい歴史教科書』のような動きが現われてくるのである。

そしてまた、1980 年代からのグローバリゼーションの時代の文化と歴史学を再検討する必要もあると思う。グローバリゼーションのもとで、知らず知らずのうちに「北」の文化や価値観が世界中に浸透している。われわれの歴史研究も、「北」の一員としての立場から西洋史や世界史を描いてしまう陥穽に陥ってはいけない。

歴史学が現実の大きな問題に対応するためには、歴史学全体を牽引する立場にある西洋史に、大きな責任が負わされている。

注）

1 上原専禄編『日本国民の世界史』岩波書店、1960 年。

2 宮地正人「幕末・明治期における歴史認識の構造」『日本近代思想体系 13 歴史認識』岩波書店、1991 年、p.510-561; 松本通孝「明治期における国民の対外観の育成――「万国史」教科書の分析を通して」増谷英樹・伊藤定良編『越境する文化と国民統合』東京大学出版会、1998 年、p.185-203.

3『巴来万国史』（1876 年）文部省刊。底本は Samuel Griswold Goodrich（Peter Parley）, *Universal History: on the Basis of Geography*, 1870.

4 師範学校編輯『万国史略』（1874 年）、岡本監輔『万国史記』（1878 年）。岡本はポーランドに特別の節を設けるほど、周辺世界に目を配っている。西村茂樹『万国史略』（1873 年）。底本は Alexander Fraser Tytler, *Elements of General History, Ancient and Modern*, 1.ed., 1801, new ed., 1866. ”Scotish orientalism” の一員であった Tytler に依拠する西村茂樹『万国史略』は周辺ヨーロッパやアジアによく目を配っている。

5 田中義廉『万国史略』（1875 年）。

6 スウイントン著、西山義行訳『万国史直訳』（1883）, 植田榮訳『須因頓氏 万国史』（1886 年）など。底本は William Swinton, *Outlines of the World History*, 1874.

7『弗氏万国史要』（1885,88 年）底本は Edward A. Freeman, *General Sketch of History*, 1874. Freeman は Aryan racist として知られている。

8 田尻稲次郎『万国史略』（1884 年）、天野為之『万国歴史』（1887 年）。

9 東海散士『佳人之奇遇』（1885 年―）は、1890 年までに出版された「前半」においては、中国、日本、スペイン、アイルランド、ポーランド、ハンガリー、イタリア、エジプト、そして朝鮮などの小国、亡国の民の連帯を説くものであった。

10 元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』（1893 年）、長沢市蔵『新編万国歴史』（1893 年）、木村鷹太郎『万国史』（1897 年）。長沢のものは、George P. Fisher, *Outlines of Universal History*, 1885 を基礎にしている。Fisher は、ドイツで歴史学の方法を学んできている。

11 中原貞七『万国歴史』（1892 年）は、上巻で中国、日本などを、下巻で欧米史を扱うという構成をとっていた。今井恒郎『万国史』（1894 年）は、「歴史上に於いて重要なる部分を占めるものをコーケシアン人種とし、モンゴリアン人種とす」とし、中国の開化は欧州諸国より幾千年も早いとし、わが帝国もその開明はけっして遅れているわけではないとしていた。大原貞馬『万国小史』（1896 年）も支那の文明とそれを担った蒙古人種を、「白哲人種」と並ぶものと位置付けている。

12 雨谷羊太郎『世界史要』（1899 年）、坂本健一『世界史』（1903 年）

13 たとえば、児島献吉郎『東洋史綱』1895 年、藤田豊八『東洋史』1897 年、修文館編『新撰東洋史』1898 年 ; 原勇六『西洋史』1896 年、小川銀次郎『西洋史要』1898 年、白鳥庫吉『新撰西洋史』1899 年。

14「アジア主義」からすれば、日本史とアジア史の分離はどのように見るべきかは、なお検討の余地がある。また、陸羯南の「国民主義」もけっして排他的ではなかったとされており、それが「万国史」「世界史」に有した意義も検討の余地がある。

15 長沢市蔵『新編万国歴史』は、歴史の方法について、歴史とは「人間生活の伝記」である。だが、歴史学はただ過去の事蹟を記載するにとどまらない。「各事実の源因結果を探求し、事実互相の関係をあきらかにし、而して一世を支配したるの主義は、前世後世に行われたる主義と如何なる関係を有するやを考察すべし。」としていた。

16 西川長夫『国境の越え方』筑摩書房、1992 年では、civilization を「文明」、culture を「文化」と訳したことについては、厳密に検討された結果ではないとしている。

17 元良勇次郎、家永豊吉『万国史綱』は、近代的な歴史学の方法をとりいれていた。いわく、歴史には二様の意義がある。その一 : 歴史とは国家の発達及び変遷に関する古今人事的諸現象そのものである。その二 : 歴史とは国家の発達及び変遷に関する古今人事的諸現象の記録なり。

18 竹内好「日本のアジア主義」丸山哲史・鈴木将久編『竹内好セレクション』II、日本経済評論社、2006 年所収。初出は「解説 アジア主義の展望」『現代日本思想体系』第 9 巻、筑摩書房、1963 年。

※本稿は本年 7 月に韓国で行われた韓国西洋史学会 50 周年記念会議での著者講演を文章化したものです。

文献紹介

Julia Adeney Thomas,“High Anxiety : World History as Japanese Self-Discovery”, in Benedict Stuchtey and Eckhardt Fuchs eds., *Writng World History 1800-2000*, Oxford University Press, 2007.

木村 英明

ロンドン・ドイツ歴史学研究所が編纂したこの本は、2000 年春に同研究所が主催した国際学会の報告をもとに企画された。姉妹本として、*Across Cultural Borders: Historiography in Global Perspective*（2002）が出版されている。両書に共通する意図は、ヨーロッパ中心主義に基づくナショナル・ヒストリーの記述とは異なる歴史学の模索であり、また西洋と非西洋のそれぞれの歴史記述文化を等価に考慮に要れた「世界史」構想の可能性、および限界の探求である。

同書は 2 部から構成されている。第 1 部には 3 本の世界史論が、第 2 部には個別地域ごとの世界史観をめぐる 10 本の論文が収められている。ここでは第 2 部から、日本における近世以降の歴史観に通底する世界認識のありかたを概観した、ジュリア・アドニー・トーマス氏の「高き切望—日本の自己発見としての世界史」に見る議論を整理紹介する。なお、議論の焦点は、世界史観というよりもむしろ世界観にあるため、本ニューズレターで南塚信吾氏が考察しているような、万国史から始まる日本の世界史教科書の執筆についてはいっさい触れられていない。

筆者によれば、一般的に世界史の記述とは、未知の怪物・野蛮人を馴致して理解可能なものに変え、馴染んだ語りの形式に包み込むことである。ところが、日本では他者の理解よりも、自己発見こそが世界認識形成の核にあった。言い換えるなら、普遍主義的な中国文化も西洋文化も理解可能な現象として受容されながら、日本自体が常に謎として残されたてきたのである。

江戸初期から第二次世界大戦後まで、筆者は日本人の世界観の変遷を 5 つのステージに分けて概略している。まず、江戸徳川期を儒学思想による中国中心史観から、国学による日本中心史観への移行という 2 つの段階に区切る。続く明治・大正期には、西洋の「科学的」歴史学が導入された。ところが、昭和初期から第二次世界大戦中には、「科学的」歴史観へ反旗を翻し、一貫した皇統のもとで近代の分断された時間・歴史の外に立つ日本を措定する史観が勢いを得た。戦後、再び西洋の世界史モデルに復帰するが、その時間軸に占める日本の位置を探る懊悩も復活した。

江戸初期から中期にかけては、中国（＝ Middle Kingdom）を政治的、文化的、倫理的、さらには地理的にも世界の中心と見なす儒学思想が支配的であった。階層的な世界観のなかで、貝原益軒や伊藤仁斎ら儒学者は、自らが中華帝国辺境の「蛮人」であると認めたうえで、中国の思想、文化の受容を通し、たとえ非中国人であっても歴史的主体足りうると論じた。さらに、中華思想の内部で日本の役割を明確化しようと、中国の聖人と神道の神々を同一視しようとする試みが、幕府の統治思想を担った林羅山や熊沢蕃山、山鹿素行、山崎闇斎らによって行われている。彼らは変化交代する中国の王朝と日本の皇統の継続性を対照して、倫理的に卓越した国民が住む土地が世界の中心である必要はないと考えるが、このいわば脱シナ化に平行して、先の聖人に見られるようなシナ・エッセンスも強調するという矛盾に追い込まれていく。

江戸期中葉にいたり、中国が Middle Kingdom の権威と価値を体現するという意識が弱まるなか、世界史の中心に日本を据えようとする国学が登場する。その祖である賀茂真淵は、日本は天地の御心に治められてきたのであり、儒教の不自然な教えがそれを阻害したとして、中国の聖人賢帝を含め、その文化や倫理いっさいを否定した。彼の教えを受けた本居宣長は、古事記の研究を通し、皇祖天照大神以来のスメラミコトを奉じる日本が宇宙の基軸であると主張した。揺るぎない皇統に基礎を置くこの世界システムに則り、ヨーロッパ人は「神国」から地理的に隔たった蛮人とみなされ（平田篤胤）、日本の使命は他国に天皇が人間世界の中心であると悟らせ、日本人

を中心的な国民と認めるように手助けすることだ（大国隆正）とされた。このような思想の流れを汲んで幕末に興隆をみる水戸学派の会沢正志斉は、『新論』において人体のメタファーを用い、ヨーロッパの蛮人が世界の手足に相当するのに対して、日本が世界の頂上である頭部にあたると述べている。

江戸期には、中華文明の辺境から世界の頂点としての「神国」日本という意識の転回を経ているとはいえ、階層的な序列のもとにある世界という見方に変わりはない。世界認識の深化というよりも、むしろそれは自国の歴史的栄光にたいする理解の発現と考えられる。

明治期に入ると、国史の資料収集と編纂を目的とした歴史研究の部局が、太政官の下に設けられた。その後、日本の歴史を他国の歴史と分離する扱い方は、東京帝国大学で制度化される。西洋史に特化された史学科とは別個に、国史を研究する学科が 1889 年に創設されたのである。『文明論之概略』の福沢諭吉、『日本開化書誌』の田口卯吉などを除けば、日本を人類史のなかで捉えようとする試みはほとんどなされなかった。西洋の影響を受けた歴史認識としては、東大に赴任したランケの弟子、ルドヴィク・ライスの流れが初めにあげられるだろう。クロノロジカルな枠組みのなかで出来事の原因と結果を考証する方法は、中国の歴史学にない新鮮さを学生に印象づけた。また、国民国家が外国との交流を通じて発展すると見なされたため、かつての鎖国は大きな失敗と解釈された。

日本がヨーロッパのクロノメーターに沿った健全な発展を阻害されたという感覚は、ハーバート・スペンサーや社会ダーウィニズムの影響をいっそう強める契機となった。馬場辰猪のような自由民権論者から天皇の寡頭政治支持者までが、その思想に染まった。馬場は社会改良は民主政治により急速に実現されるべきであり、さもないと日本は永遠に欧米の後塵を拝すると考えた。いっぽう、東大綜理（総長）を務めた加藤弘之は、すでに外国に支配権を握られた世界への参画を目指すよりも、日本は自国の発展に意を注いで、上からのゆっくりした改良を図るべきとした。また、ダーウィニズムに立脚する、西洋にたいする日本の劣等性と服従の意識は、井上哲次郎の国家主義に見られるような、国家安全保障に関する偏った議論を導いた。同様に、当初はスペンサーに同調していた徳富蘇峰も、日本と世界にたいする西洋のヘゲモニーに反発して、軍事的に強固な日本を主張するようになった。しかし、江戸徳川期と比べればダイナミックな世界観がもたらされたとはいいながら、世界の階層性という感覚に変化はない。

明治・大正期の歴史観として、さらにマルクス主義の理論がある。ここでもまた、争点は理解し得る世界秩序ではなく、日本の位置にあった。たとえば、明治の日本はブルジョア革命を経ており、プロレタリア革命に短期に移行できるという講座派と、いまだブルジョア革命の中にあるとする労農派の 1920 年代における論争は、日本が封建主義からプロレタリアート革命にいたる道筋のどこに位置しているかを、目的論的に定義しようとしたものだった。結局、コミンテルンが介入し、日本は革命に至るには十分に発達していないと断じた。

昭和の戦争期になると、諸々の西洋優先の世界史に反発した知識層から、ドイツ観念論と弁証法を知的背景に、日本の歴史的主体としての究極性と、超越的なレヴェルで諸国を統一する世界史的使命を説く文化人が現れる。盧溝橋事件から 1 年後の 1938 年には、近衛文麿の諮問機関・昭和研究会のメンバーであった三木清が、世界史的な意義を事件に認めている。三木によれば、アジアの一体化が日本の歴史的使命であり、それこそが資本主義社会の矛盾を解消する。その使命は、盧溝橋事件を契機に実現に向うべきものであった。国家イデオローグの西谷啓治は、日本による統一の使命を大東亜共栄権のみならず世界全体に敷衍した。西田幾多郎もまた「国体論」（1944）において、世界形成の歴史的な要素を日本の宗教性と聖性に見出している。奇妙なことに、彼らは歴史の弁証法を強調しながら、いっぽうで不変の天皇の存在を日本のアイデンティティーの核心に据えている。皇統一姓の純粋性は、いかなる弁証法的、あるいは革命的、科学的な歴史変容も損なうことがないのである。江戸時代に中国中心主義に対する反抗があったように、この時期は西洋中心主義への反発が噴出したと捉えることができるが、同じようにまた、世界ではなくて日本を再解釈したという側面が強い。

第 2 次世界大戦を経ても、世界史における日本の位置の問題は解決されなかった。丸山真男は日本におけるイデオロギーの錯綜、ナショナリズムの複雑さをまさにそこに見ている（『日本のナショナリズム』、1963）。松本三之助は近代化が組織や法の外的世界にとどまり、個人の内面にまで及ばなかったため、真のデモクラシーが生まれなかったと論じ、世界史に追いつくためには、革命を達成した中国のような非イデオロギー的ナショナリズムによる発展が必要であると説いた。世界史の階層制というパラダイムに身を置いた、日本の特殊性という自己イメージは相変らずである。ハリー・D. ハルートゥニア

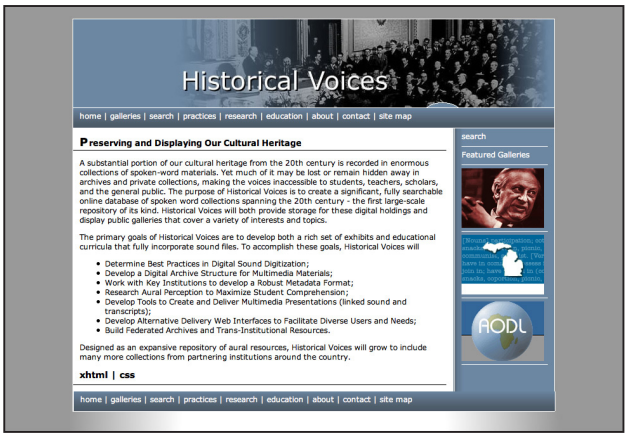
ンは、松本の議論を受け、「日本は事実上近代社会なのであり、近代性（modernity）ではなく近代化（modernization）が引き起こす問題と直面すべきである」と反駁している。理解しやすくて問題のない世界に対置された、理解しがたくて問題のある日本というパラダイムへの固執は、歴史家が現代世界を把握する責任を回避することを容認してしまう恐れがあるのだ。

もし、どの文化も他者にたいして自己の等価性や優越性を主張すると仮定するなら、日本の知識人が中国にたいして「蛮人」と自認し、また西洋にたいして「発展途上者」、「失敗した革命者」と自己規定するのは、精神社会病理学上の徴候といえるだろう。他方で、世界史上最も悲惨な結果を招いた戦争期に、日本の優越性を説いた議論のほうが精神医学上では正常ということになってしまう。しかしながら、もし文化の前提である存在のカオスに意味の体系を接木してみるなら、異なる位相で日本の世界理解のパターンを捉えられるだろう。それは、グローバルな諸構造のなかにあって、自己定義を切望する志向を導くひとつの堅固な構造体なのだ。さらに、世界を階層的な秩序のなかに描き、日本の位置を探求する傾向は、2 つの意味で示唆的だろう。第 1 に、世界史を書くということがイデオロギー的に中立ではありえないと、日本の学者は正しく認識していた。いかなる選択がなされようとも、ある語りは別の語りに優先し、ある政治的可能性は別の政治的可能性に先んじる。第 2 に、世界の階層性と日本の位置という反復されるパターンは、あらゆる知識構造の潜在的力、また国民と言語が、いかに深く網の目に絡まるように意味のコードに居住しているか、を思い起こさせる。パラダイムの転換を企てる反逆者でさえ、伝統的な構造を再生産してしまうのである。しかしながら、われわれはいま、国民国家、階級、人種、性差などを生み出したモダニティの遠い果てに立っている。そして、グローバルな人口増や環境的限界、未曾有の政治的、経済的変化が構成する「世界」を再概念化する必要に迫られているのである。

Web 世界史

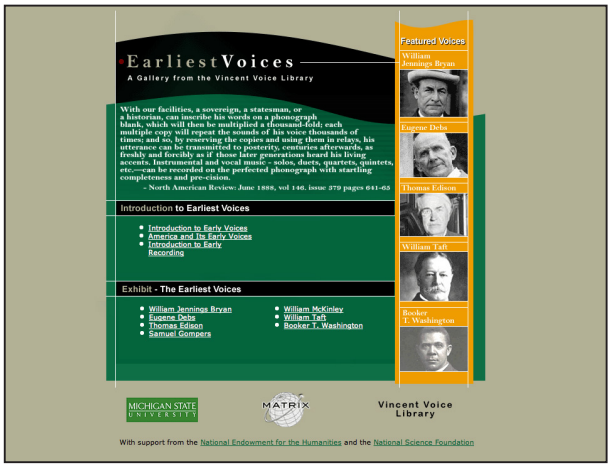
毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。

Historical Voices　http://www.historicalvoices.org/



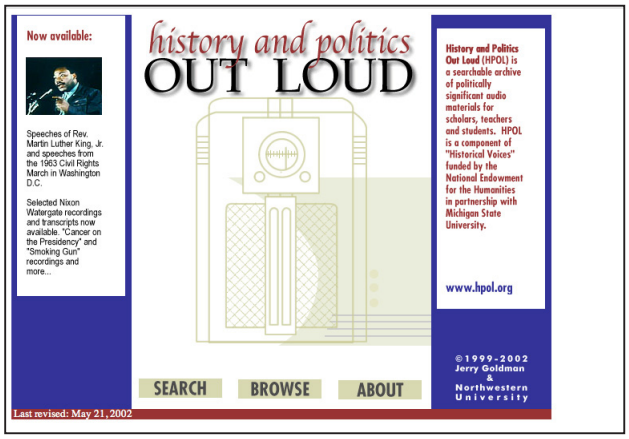
▲ Historical Voices
http://www.matrix.msu.edu/

今回紹介するのは、音声データを資料として提供している Historical Voices というウェブサイトです。同サイトはアメリカの国立科学財団（National Science Foundation）と国立人文基金（National Endowment for the Humanities）が出資し、ミシガン州立大学の MATRIX（http://www.matrix.msu.edu/）が管理・運営しています。（人文・社会科学系研究者のメーリングリスト H-Net も MATRIX が運営に携わっています。）Historical Voices は現在進行中のプロジェクトであるため、残念ながら音声資料の検索システムがまだ構築されておらず、いくつかのギャラリー別に資料が公開されています。そのうちのいくつかを紹介したいと思います。



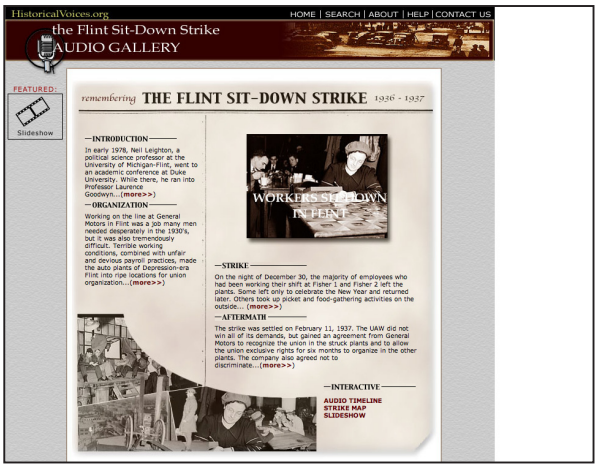
▲ Earliest Voices
http://www.historicalvoices.org/earliest_voices

Earliest Voices（http://www.historicalvoices.org/earliest_voices）というサイトでは、1877 年から 1927 年の 50 年間に録音された音声のうち、労働運動家でアメリカ社会民主党創設者であるユージン・デブス、第 25 代大統領のウィリアム・マッキンリー、同 27 代ウィリアム・タフトなど、7 名の音声資料が展示されています。また、1877 年に録音技術を発明したトーマス・エジソンの声も収録されており、技術が広まった初期の時代の音声を聞くことができます。音声データは字幕（トランスクリプト）付きのデータと音声のみのデータの二種類があります。



▲ History and Politics Out Loud
http://www.hpol.org/

History and Politics Out Loud（http://www.hpol.org/）では、アメリカの歴史や政治に関する音声資料が提供されています。現在のところ、1960 年代から 70 年代を中心に、104 点のデータが公開されており、特にジョン・F・ケネディ（キューバ危機に関するもの）と、リチャード・ニクソン（ウォーター・ゲート事件に関するもの）の音声が多く収められています。他にも、マーチン・ルーサー・キング Jr. の有名な演説 "I have a dream" や、フランクリン・ルーズヴェルトやジョージ・マーシャルといった歴史上著名な人物たちの音声もあります。



▲ Flint Sit-Down Strikev
http://www.historicalvoices.org/flint

Flint Sit-Down Strike（http://www.historicalvoices.org/flint）では、1936 年から 37 年にかけてミシガン州フリントのゼネラル・モーターズ工場を中心に起こった労働者の座り込みストライキに関する音声資料を、ストライキの歴史の解説とともに公開しています。これらの資料は、1978 年から 1984 年にかけて、ある労働史研究プロジェクトによってかつてのストライキ参加者・関係者にインタビューが行われ、その際の音声テープをデジタル化したものです。オーラル・ヒストリーの研究がどのように構成されているのかを知るためにも、良い資料を提供してくれています。

歴史資料としての音声や映像の記録については、図書館などで視聴可能なものもありますが、オーラル・ヒストリーのプロジェクトごとに収集され、調査報告が印刷物となって出版される形態が多いと言えるでしょう。一方でこれらのサイトでは、音声資料を活字として引用するのではなく、肉声として伝えることに力点が置かれています。聴取者は、よりリアルにこれらの資料によって歴史を追体験することになります。公開されている音声資料はまだ、十分な質と量に達してはいませんが、今後マルチメディア・データを活用した歴史研究の方法の確立に向けた取り組みがなされていくことでしょう。

世界史研究所からのお知らせ

アジア世界史研究者ネットワークの設立に向けて パトリック・マニング氏からの提案

ピッツバーグ大学のパトリック・マニング氏よりアジア地域の世界史研究者に向けて、研究者ネットワークの組織化に向けた提案がなされました。この試みは同氏が中心になって立ち上げようとしている世界史研究者国際ネットワーク（INWHO: International Network of World History）と関連するもので、このアジア地域での世界史研究者ネットワークは同団体のアジア支部として期待されています。2008 年 5 月に中国、天津市の南開大学にてアジア世界史研究者ネットワークの設立に向けた会議が開かれることが予定されています。

マニング氏によれば、アジア地域における世界史研究者が連携することで、「アジアおよびオセアニア地域で活動する世界史あるいはグローバルな視座を持つ歴史研究者の間で意見交換を行い、研究主題、研究方法や問題意識を発展させることによって、個々の研究をより実りあるものとすること」が意図されています。またアジアでの議論は、国際的な組織である INWHO、そして INWHO が加入を希望している国際歴史学会議（CISH）を通じて、全世界での歴史学研究へと還元されていくことが期待されています。

現時点では、アジア地域における世界史研究者のネットワーク構想に日本、中国、韓国からの参加が予定されていますが、それ以外にもシンガポール、マレーシアおよびインドの世界史研究者も参加を検討しています。またオセアニア地域の世界史研究者もアジアのネットワークへの参加を希望しており、アジア世界史研究者ネットワークは幅広い地域をカバーすることになります。そのため、マニング氏は同組織の設立に向けた準備に関して、次のような提案しています。

1. 南開大学が担当する Web での情報発信およびメーリング・リスト、Web チャットといったインターネット上でのコミュニケーションを利用し、設立に向けた議論を行う。
2. インターネット上でのコミュニケーションの支援および設立準備に向けた事務局を立ち上げる。事務局は世界史研究所および大阪大学史学科をその候補として検討する。また、事務局設立まではマニング氏が所属するピッツバーグ大学がその役割を果たす。

現在、世界史研究所では、マニング氏の提案を受け、アジア世界史研究者ネットワークの組織化に向けて、どのような支援が可能か検討を行っております。

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F　TEL：03-3400-1216　FAX：03-3400-1217
E-mail：world_history@npo-if.jp　URL：http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/